

### 平和を織りなす二本の糸

(ロマ五・一、エペソ二・一一〜一六)

メヌエツトピアノ教室のコンサートで「天賦の才」を実体験した。残念ながら私たちのキッズクワイヤでも、音大生たちの「こどり音楽隊」でもない。みな一生懸命だし上手ではあるのだが。ではその天賦の才は何処にと聞かれればそれはコーラスグループ「三杉歌の会」が歌った「糸」の中に埋まっていた。とはいえその中に世紀のボーカリストがいたわけでもない。天才は詩の中にいた。「ニューミュージック(ー)の女王」中島みゆきさんのソングライティングの才能にやられた訳だ。特に「逢うべき糸に会えることを人は仕合せと呼びます」は秀逸。歌を聴き、落涙を禁じえなかつた。緩みつばなしの涙線に年だなあと思うことしばしであるが、出てしまうものは仕方がない。

閑話休題。今朝も先週に続いてイエス・キリストについて、特に彼がこの世に与えた平和について考えたいのだが、主イエス・キリストが与えた平和はご自身の十字架にも似て、縦と横に伸びている。件の歌の比喻を借りれば縦糸と横糸だ。以下それぞれについて説明を加えてみたい。

#### 一、神と人を結ぶ縦の糸

新改訳聖書(第三版)でロマ五・一を読むと、その欄外に異本の訳が載っている。そこには「神との平和を」持とうではありませんか」とある。「持っています」と「持とうではありませんか」ギリシャ語ではこの違いはわずか一文字、オメガとオミクロンの違いではないが、意味的な差は大きい。というのも「持とうではありませんか」となれば平和はこれから持つことになるが「持っています」では事実の宣言になるからである。今日ほとんどの聖書は「持っています」の方を支持し、それに従って解釈を行っている。信仰によって義と認められたキリスト者は神との間に平和な関係を与えられている。対してこの信仰を知らない、或いは拒む者は神との間に平和を持っていない。内にある人の罪の行いが神の怒りを惹起させ、人間の側には良心の呵責が起こってくるのだ。これは聖書だけが言うのではない、救急救命士のM.オライリー氏は最近のTED TALKの中で人間は宗教や文化背景の別なく、死の間際に赦しを乞うというが、それはある意味人間の中にある神への恐れが表出したものと考えられる。その恐れを主はキリストにあつて癒し、私たちとの間に平和を造り、心を平安で満たして下さるのである。これが神と人とを結ぶ縦の糸である。

#### 二、人と人とを結ぶ横の糸

続いてはエペソ二章の一一節からなるのだが、そこではイエス・キリストが「わたしたち」と「あなたがた」の間にあつた隔ての壁を打ち破つたお方であることが強調されている。またその結果としてこの両者の間に平和が樹立されるとパウロは説く。問題はここでの「あなたがた」と「わたしたち」はそれぞれ誰を指すのかということである。「わたしたち」は簡単である。それはこの手紙の著者パウロと他のユダヤ人たち以外にない。では「あなたがた」はどうだろうか？ ヒントは一二節にある。そこにはイスラエルの国からの除外であるとか、他国人と言ったことがある。つまりパウロによつて「あなたがた」といわれているエペソに住むクリスチャンたちは、非ユダヤ人であることが解る。こう考えていくと、ここでの「隔ての壁」とは神と人との間にあつたものではなく、ユダヤ人と異邦人の間に存在していた、いや今もしている民族間の敵対関係を表す比喻であることが解る。真正にキリストを信じた人に与えられる平和は神との垂直な次元だけではない。その平和は神が創造し、キリストにあつて救われた他の民族の人々との間、即ち水平の次元にも作用するのである。キリストは神と人を結び、人と人とを結ぶ完全な愛の帯なのである。

\* \* \*

先週の日曜で真珠湾攻撃から七十六年が経過したわけだが、真珠湾攻撃の英雄、「トラ・トラ・トラ」の淵田美津雄中佐のその後については最近放送されたNHKスペシャルによつて、より多くの人に知られるところとなった。真珠湾の英雄として皆の尊敬を受けていた彼は終戦と共にあらゆるものを失った。その過程で彼の心を焦がしたのは「憎しみ」だった。そんな彼が変えられたのは、同じく日本人を憎みぬいたデイフューザーという爆撃機乗りとの出会いがあつたという。日本軍の捕虜となったデイフューザーはやはり憎しみを増幅させていたがイエスキリストに出会つて心が変わられ、日本宣教に立ちあがつた。淵田はそのことを知り、それをきっかけにキリスト者になり、淵田はアメリカで、デイフューザーは日本で平和の福音をのべ伝えた。彼らの生涯は『ふたりの贖罪』と題されたのだが、このタイトルは恐らく当人たちは喜ばないかもしれない。というのは彼らが罪を贖つたわけではないからである。彼らの行動はむしろ平和の君イエスによる贖罪への応答なのだ。友よ、真の平和を得ようとするなら、真に温め合い、傷をかばいあうお互いでいたいのなら、逢うべき糸に出会わなければならぬ。その糸の名はイエス・キリストである。